

学術基本用語集作成の試み

角 知行

要旨

筆者は 2009 年 5 月に大学新入生の学術日本語力をはかる学力調査を行った。その際、語い問題の典拠となる学術用語集が必要になった。用語の理解という観点からアカデミック・ジャパニーズ (A J) をとらえた場合、領域横断的な重要語や頻出語をまとめた学術基本用語集はおおきな意味をもつ。英語では、これに相当する AWL(Academic Word List)が作られ活用されている。一方、日本語 (国語) では小学校段階の学習語い集や教育語い集はあるものの、学術基本用語に関する語い集はまだない。そこで現代国語の大学受験用キーワード集に依拠して、434 語の学術基本用語集を試作し、ここから学力調査の語い問題を抽出した。学術基本用語集は、学力調査の評価指針となるばかりでなく、語い指導や教材選択の指針にもなり、A J 教育のうえでいろいろな活用法が期待できる。

キーワード

教養教育、学術基本用語、学術基本用語集、Academic Word List、初年次教育

1. はじめに

大学生を対象にした日本語テストには、基礎学力判定テストやプレースメントテストといった名称で市販されているものがある。漢字能力検定や日本語検定など、既存のテスト問題が利用されることもある。筆者は 2009 年度、大学新入生を対象に語いを中心にした日本語の学力調査を実施することになった。そのため、事前に既存のテストをいくつか検討したが、必ずしも納得できるものではなかった。

これらをもて不満に思うのは、語いの選択基準がないということである。たとえば「茶飯事」「一目おく」「難をのがれる」といった問題が出題されている。日常語として知っていたほうがいいのだろうが、これらが大学生の学力とどうつながるのか不明である。漢字問題にしても、語いと関連は必ずしも明確ではない。漢字知識は語いの前提にすぎない。重箱の隅をつつくような問題は学力とは直接に関連がないであろう。

そこでアカデミックな環境へと学習者 (回答者) を体系的に導くべく、語い問題の母体となる学術用語集を作ることにした。大学生の学力を測定するためには、レベルや範囲がそれに対応した用語集が必要だと考えたからである。ちょうどその頃、高校までの教科用語について論文をまとめていたということもあった。ただ学術用語集については事例がほとんどないため、試行錯誤を余儀なくされた。

以下では、2 節で学術用語の位置づけ、3 節で学術用語集の先例の紹介をして、学術用語 (集) 一般に関する知見をまず述べる。ついで 4 節で筆者が作成した用語集、5 節で初年次教育でのその利用可能性を示し、学術用語集の一事例に基づく報告を行いたい。

2. 学術基本用語とは？

2. 1 教養教育と学術用語

アカデミック・ジャパニーズ（以下、「A J」と略記）は、日本留学生試験の報告書では、「日本の大学での勉学に対応できる日本語力」と定義されている。用語（語い）レベルというならば、それは日本の大学の勉学に対応できる学術用語の知識ということになる。高校までに国語科の学習などによって獲得される学術用語は、大学での学習の基礎となる。それは大学生の語い力を測定する基準としてもふさわしいであろう。

学術用語は、日本語教育や国語教育では必ずしも明確に意識されてきたわけではない。水本光美と池田隆介は、化学・機械・建築・情報に関する教科書や新聞記事をデータベースとして、高校卒業までに一般常識として習得しているべき「基礎専門語」（「化学」「物質」「排出」といった用語）を抽出し、調査をおこなっている（水本光美・池田隆介：2003）。それによると、えられた基礎専門語のうち、日本語能力試験1級までの語いにふくまれない0級（級外）の語いは、延べ語数で25%、異なり語数で45%をしめていたということである。これらの語いは、大学進学を目指す日本語学習者が予備教育機関において学ぶことを保証されていないものであり、それが学部入学後の学習を困難にする1つの要因となっている。著者たちは、基礎専門語に関する導入教育の実施を主張している。

学術用語に関する知識は、留学生ばかりではなく、日本人学生についても必要である。学術用語の知識を欠いた学生は入学後の学習に困難をきたすことは十分に予想される。1991年の大学設置基準の大綱化以降、教養教育は「全学共通科目」「総合教育科目」などの名称で部分的なものに矮小化され、学術用語を学ぶ機会や時間は大幅に減少している。退学者や除籍者の増大がどこの大学でも問題になっているが、その一因にはこうした基礎学力の不足もあると考えられる。

A Jとは、門倉正美によれば教養教育である。（門倉正美・筒井洋一・三宅和子：2006、p.7）。市民的教養の獲得はA Jにおいて重要な意味をもつ。そのためには、具体的な知識とともに、それらを基礎づける学術用語の獲得も重要である。学術用語に関するあらたな研究や教育が、いま求められているといえる。

2. 2 学術用語をめぐる名称

ところで、大学等の高等教育機関で必要とされる一般的あるいは基本的な学術用語は、何と名づけるべきであろうか。国語学ではこれに近い用語として「知的基本語い」（窪田富男）とか「方面別基本語」（林四郎）という用語もあるが、それほど普及しているわけではない。むしろ一般的には「学術用語」とか「専門用語」という表現がつかわれている。両者の意味はほぼ重なるものの、文部科学省の支援をうけていくつかの分野で「学術用語集」が刊行されていることもあり、前者はややフォーマルな文脈で用いられる。一方、後者はもともと大学での研究に限定されることなく、職業や趣味の分野でも幅広く用いられる用語であったが、現在では専門日本語教育研究会の活動などもあり、大学等で用いられる用語というニュアンスが強まりつつある。「学術用語」もしくは「専門用語」という名称は、大学で必要とされる基本的な用語の名称の有力な候補である。

それと同時に、A Jの領域を横断した一般的な用語と、経済学、化学などの各専門分野に特有の用語とは区別されなければならない。それは教養教育と専門教育の次元が区別されることにもよる。こうした理由から以下では、A Jにおいて領域横断的に選定された一般的な用語をさす場合は「学術基本用語」を、一方、各専門分野から選定された専門的用語

をさす場合は「学術専門用語」を使用することにしたい。大学で学ぶ学術用語は、主として教養教育（総合教育、全学共通教育）で身につけるべき学術基本用語と、専門教育で身につけるべき学術専門用語からなる、といえる。

大学の教養教育と専門教育の関係は、高校以前の段階では国語科と他教科との関係に似ている。教科としての国語は、生徒の思想・感性を育成するとともに日本語でかかれた他教科の教科書や資料をよむ語い力や読解力を提供することに主要な意義がある。その意味で「すべての教科学習の基礎」といわれる。したがって社会、理科など他教科に特有の用語を「教科専門用語」ということにすれば、「教育語い」とか「学習語い」ともよばれる国語科の用語は「教科基本用語」ということができる。

A Jは大学教育の始点に位置していると同時に、高校までの学習の終点にも位置している。学術基本用語は高校以前の教科基本用語（教育語い、学習語い）に接続し、学術専門用語は教科専門用語に接続する。その連続性が忘れられてはならないであろう（教科用語のよりくわしい定義については、角知行：2009を参照されたい）。

3. 学術基本用語集の事例

3. 1 用語集作成の方法

学術基本用語を上のように定義したとして、次のステップでは、その用語を収集して用語集を作るという実務的な作業にとりかからなければならない。学術用語集の作成方法は、おおきくわけて二通りある。

ひとつは、教科書や参考書をデータベースとして、用語の出現頻度（使用度数）をしらべるものである。たとえば国立国語研究所が1983年、1984年に刊行した『高校教科書の語彙調査Ⅰ』『高校教科書の語彙調査Ⅱ』（秀英出版）はこうした手法をとっている。1974年度に使用されていた高等学校教科書のうち、理科4教科、社会5教科について語いの使用度数、比率、全体順位が調査され、まとめられている。この観点からすれば、頻度とカバー率が選択の基準ということになる。

もうひとつは、おなじく教科書や参考書を対象にするものの、教科にとっての重要度を考慮して用語をえらぶものである。たとえば小宮千鶴子（2005）は、留学生のための化学の基本的な専門語を選定するため、高校の「化学ⅠB」の教科書15冊と、「化学Ⅱ」の教科書10冊の索引の語句を対象にして、いずれか一方の教科書索引の半数以上に収録された専門語740語を「理工系留学生のための化学の専門語」としている。ここでは「教科書索引の半数以上への掲載」という基準が重要度の目安として採用されている。

どちらの方法がすぐれているか、一概にいえるものではない。統計的・研究的な意味をもつのは出現頻度であろうが、現場で実用的意味をもつのは重要度であろう。学術用語は、基本用語にしても専門用語にしても、無秩序ではなく、系統的、組織的に存在している。当然、重要度の軽重はある。読解においても、教科内容の概念を叙述するための文章の根幹に関わる用語は、はるかに重い意味をもっていると考えられる。

3. 2 A Eをめぐる学術基本用語集

A Jの基本をなす用語を「学術基本用語」とよび、その用語集を作るにしても、はたして先例はあるのだろうか。日本語における可能性を考えるまえに、まず英語の例をとりあ

げることにはしたい。アカデミック・イングリッシュ（以下では「AE」と略記）における学術基本用語集については、少なくとも3種類の存在を確認できる。

第1は、英語圏での学術データベースにもとづいて作られた学術基本用語集である。著名な英語語い論研究者のネーションは、アカデミックなテキストにみられる語いとして、つぎの4種類を区別している（NATION, I.S.P.:2001=吉田晴世・三根浩訳：2005）。高頻度語、学術用語（Academic words）、専門用語（Technical words）、そして低頻度語である。高頻度語とは一般の文書にも高い頻度であられる約2,000語で、アカデミックテキストの約78%をカバーする。学術用語は、特定の領域に限定されず、人文、社会、自然科学の幅ひろい学術分野から収集された用語である。これは本稿の用語でいえば、学術基本用語にあたる。もっとも有名な学術用語集としてはコックスヘッドによる「Academic Word List (AWL)」がある。これは彼女が約350万語のAEのコーパスからつくったもので、「abandon」から「widespread」にいたる570語がリストアップされている。AWLはアカデミックテキストの約9%をカバーし、高頻度語とあわせてカバー率は約87%に上昇する。専門用語はある対象分野と密接な関係がある単語、低頻度語は固有名詞などからなる単語のことで、あわせて残りの約13%をカバーする。

このように位置づけられたAWLは、とくに「リテラシーの危機」がさげられる昨今のアメリカにおいて、学力向上のための指標としてよく利用されている。単語集や練習帳から、読解教材にアレンジされたものまで、さまざまである。さらには幼稚園から高校にまで学術用語の範囲をひろげたものもある（たとえばJOHNSON, E.R.:2009）。

第2は、日本の大学で使用されるAEをデータベースとして作成された学術基本用語集である。2009年には京都大学から英単語集が出版されて話題をよんだ（京都大学英語学術語彙研究グループ+研究社 2009 『京大学術語彙データベース 基本英単語 1110』研究社）。同書のはしがきによれば、これは全学共通科目英語、つまり一般学術目的の英語（English for General Academic Purposes）を対象として選定された単語集である。各学部・研究科の教員に、各専門分野の学部生・院生にとって必読と思われる英語学術雑誌（約170種）を選定してもらい、ここからいくつかの学術論文を無作為抽出してデータベースがつけられた。そのデータベースの上位の語いリストのうち、一般語い（約2,000語）を削除して学術語いを作成し、さらにそこから大学教育の観点に基づいて取捨選択したものである。ここには、文系・理系に共通な学術語い477語と、文系に共通な学術語い311語、理系に共通な学術語い322語が選ばれている。

第3は、大学受験で出題される入試問題をデータベースとする単語集である。大学受験で出題される英語の問題は、高校までの英語の学力を確認すると同時に、大学でもとめられる英語の学力を判定するという目的もある。その意味で、AEのひとつのデータベースとみなすことができる。近年は、たとえば河上源一著、根岸雅史監修『大学入試 頻度順英単語』（桐原書店、2007年）のように、入試問題をコンピュータ分析したものもある。同書のはしがきによれば、過去7年間の入試問題（369大学、16,000問、のべ語数525万語）につかわれた英単語約13,000語を収集、分析し、それを頻度順にならべたということである。上位1,800語をマスターすれば、総語数の約90%がカバーできるとされ、このうちの約1,600語が収録されている。

一方、同じような大学入試用の単語集であっても、頻度よりは重要度に重点をおいた単

語集もある。たとえば森一郎『試験にでる英単語』（青春出版社）は1967年に初版がだされて以来、いまもベストセラーをつづけている怪物のような単語集である。これは、「最も重要な単語から順番に配列する」という方針にしたがって、約1,800語が並べられている。売りは「重要度順」である。同書23～24頁には「われわれにとって最重要単語というのは、使用頻度の多いものではなくて、たとえ、そんなにしばしば使用されないものであっても、その1語の意味を知らないと、その文全体の意味が把握しにくくなるような、知的・抽象的な単語である」と述べられ、その意義が強調されている。

これらの学術基本用語集のうち、単純にデータベースの大きさからいえば、AWLや『頻度順英単語』がすぐれている。しかし、1語のキーワードが他のいくつもの未知語よりも重要な意味をもつことがあるという読解プロセスを考えるならば、頻度やカバー率だけを絶対視することはできない。もうひとつの基準として、重要度がどう組みこまれているかが用語集の評価には必要であろう。重要度を基準にした『試験にでる英単語』が、現場の支持を得て今なお版を重ねていることは、その意味で示唆的である。『京大学術語彙データベース』も、「大学教育の観点に基づいて」という選択基準が併記されていることが注目される。

3. 3 A Jをめぐる学術基本用語集

英語では学術基本用語集の存在が認められるが、日本語においてはどうか。幅広い学術分野からデータベースを作成し、そこから頻度や重要度によって用語を収集するという用語集は、残念ながらまだないというのが現状である。国立国語研究所の『日本語基本語彙—文献解題と研究』はこれまでに出版された122の語い集をあつめ、それぞれの概要を見開き2ページにコンパクトにまとめている。これをみても、小学校、あるいは初級日本語が大半で、大学の教養教育をデータベースとするものはない。この書を中心的にまとめた甲斐睦郎は「中学校、高等学校の国語科の教科書は語彙量が大きいので、まだ一度も用語調査がおこなわれていない」とのべ、中学校、高等学校の国語の語い集さえまだない現状を明かしている（甲斐睦郎：2002、p.39）。

日本語教育の分野でも、A Jを対象としたものは見あたらない。『日本語能力試験 出題基準』（凡人社、1994年）には日本語能力試験1級・2級語いの調査対象資料が掲げられている。調査対象には、『中学校教科書の語彙調査』『高校教科書の語彙調査』『日本人の知識階層における話しことばの実態』といった資料もふくまれているが、大学教育やそれにつながる資料はない。1級、2級の語い数をあわせると16,000語にもなり、かなり難易度のたかい語いがあることも事実である。しかし、アカデミック・ライフにおける言語活動を前提として編集された資料ではないため、大学受験あるいは大学の教育レベルに相当する語いは、後に見るように、それほど収録されていない。

学術専門用語については、各分野で『経済学辞典』『化学辞典』などの辞典が刊行され、整備されている。基本的な用語だけを選定した用語集もある。しかし、学術基本用語に関しては、おなじような辞典や用語集の類は見あたらない。

A Jをデータベースとして作成された学術基本用語集としてただひとつ存在を確認できるのは、A Eの3番目にあげた大学受験英語用単語集にあたる、大学受験国語用単語集（キーワード集）である。現代国語の入試問題文は評論文と小説文のふたつのジャンルからな

る。とくに前者を対象とするのがこの単語集である。

受験問題に出題される現代国語の評論文ははたしてA Jといえるのだろうか。受験国語の問題を分析した書をいくつも執筆している石原千秋は、「大学受験国語は時代を映す」とのべている(石原千秋:2007)。戦後、各時代の有力な思想がその時々の大学受験国語の問題に採用されてきた。市民社会派(丸山真男、加藤周一)からニューアカデミズム(中村雄二郎、山口昌男)へ、そしてカルチュラル・スタディーズや鷺田清一へ、といった具合である。現代国語の試験問題はそうした意味で、時代の思想あるいは時代の論点とつながっており、市民的教養としてのA Jのひとつのデータベースを構成しているとみることができよう。

4. 学術基本用語集の作成

今回、学術基本用語集の作成にあたっては、唯一参照できる大学受験国語用の単語集(キーワード集)をまず検討することにし、編集がしっかりしている次の5点をえらんだ。

- ①大前誠司 2007 『新入試評論文読解のキーワード 300』明治書院
- ②長野研一 2008 『大学入試 現代文キーワード&ボキャブラリー 320』文英堂
- ③伊原勇一 1997 『大学入試 現代文キーワード 500 (改訂版)』桐原書店
- ④大槻岳 2006 『すらすらできる現代文基本用語 700』東進ブックス
- ⑤中村幸弘・宮原俊二 2006 『現代文の重要語 テーマで覚えるキーワード 800』ライオン社

これらは大学の入試問題を基にしているが、A Jの観点からいえば、その現場である大学の教科書や資料をデータベースとして作成されるのが、学術基本用語集の本来の姿であろう。そうした意味では、データベースの質にやや問題がある。また作成の基になったデータベースの量や単語の頻度に関するデータはどこにも示されておらず、その意味で客観性に欠ける面がある。ただしこれについては、実際の学習や試験の場面で役立つという機能を果たさなければ単語集として淘汰されていくことになるので、実用性という観点から、その弱点もある程度は克服されていると思われる。

これらの単語集のもうひとつの特徴は、単語の重要度も考慮して編集されている点である。上にあげた5点の単語集はいずれも、よく使われる用語(頻出語)以外に、あるテーマに関するキーワード(重要語)を収集の基準にしている。たとえば一例として②をとりあげてみよう。そのはしがきには、論理的な文章全般によく使われる語などのボキャブラリーを265語、あるテーマを論じるのによく出てくる語などのキーワードを55語、合計320語を選んだとある。後者のテーマとしては、「近代の成立」「合理化の思想」「主客二元論の思想」「日本の近代化」「異文化理解」「言葉の本質」「コミュニケーションの方法」「国際化の進展」「情報の質的变化」という9項目があげられ、それぞれキーワードがいくつか並べられている。こうした二面的な構成は、他のキーワード集でも同様である。それぞれが手を変え、品を変え、キーワードに迫ろうとしている感がある。

以上の点をふまえて、これらの単語集は、データベースの質、語いの選択の客観性にやや欠けるものの、読解力の向上につながる重要度の基準も十分に考慮して編集されている点で、学術基本用語集のモデルになりうると判断した。そして用語集作成の作業を進めることにした。まず、5冊の用語をすべて網羅した表を作り、つぎにそこから共通するもの

を取りだした。共通する語には、より客観性があると考えられるからである。こうして少なくとも2冊以上で取りあげられている語、434語をとりあえず学術基本用語として選定した(表は参考資料として巻末にかかげてある)。

表をみてまず気づくことは、「思想関係の用語」と「一般的な用語」という二種類が混在していることである。重要語(キーワード)と頻出語の抽出というふたつの選定方針の存在が、二種類の用語を混在させた要因であると考えられる。前者には、たとえば「エコロジー」、「グローバリズム」、「構造主義」、「国民国家」、「自由主義」、「ナショナリズム」、「人間中心主義」、「ヒューマニズム」、「文化相対主義」など、ある思想的な立場をあらわす用語がある。これらの理解には、国語科だけでなく、現代社会や倫理社会などの総合的な知識も必要である。さらに各思想の下位概念となる用語もみられる。たとえば構造主義の下位概念となる、「コード」、「差異」、「恣意」、「体系」、「分節」などもあげられている。この用語集はいくつかの思想的立場にグループ分けすることができそうである。受験国語の評論文は、総体としてみると現代思想のひとつの見取り図になっている。

もう一方の「一般的な用語」とは、たとえば、「曖昧」、「アイロニー」、「軋轢」、「アプローチ」といった類の用語である。これはある思想に特有というよりも、評論文にひろく見られる用語であり、頻度の観点からピックアップされたと思われる。名詞の形をとっているが、形容(動)詞や動詞に変化させられるものも多い(「曖昧な」、「アプローチする」等)。

「リーディングチュウ太」^(注1)を利用して、この用語集について、日本語能力試験の語い級別判定を行った。その結果は、4級は0語(0%)、3級は1語(0.2%)、2級は32語(7.4%)、1級は60語(13.8%)、0級(級外)は341語(78.6%)であった。80%ちかくが1級までに含まれない級外の語いであることが注目される。

表記別にみると、漢語とカタカナ語との割合は、漢語が367語(84.6%)、カタカナ語が67語(15.4%)であった。漢語のうち、常用漢字だけからなる漢語は285語、常用漢字以外をふくむものは82語であった。実際の学力テストの語い問題では、カタカナ語8語、漢語(常用漢字のみ)8語、漢語(常用漢字以外をふくむ)8語をそれぞれの母集団から無作為抽出して、相互の差をみることにした。漢語については意味のほかにも読みも尋ねた。

5. むすび：初年次教育における活用法

筆者は2003年度より、勤務先の大学で、初年次教育として開講されている「基礎ゼミナール」を担当してきた。この授業で使用している大学独自のテキスト(天理大学総合教育研究センター編『基礎ゼミナール学生用テキスト』)の編集にもかかわってきた。今回、学術基本用語集は、初年次教育にいろいろな形で利用することができることを実感した。考えられる活用法として、評価の指針化、語い指導の指針化、教材の指針化の3点が挙げられる。

第1は評価の指針化である。学力テストの語い問題として採用したように、A Jの学力を評価する際の指針になる。小学校の学習語い表の作成にあたった田中久直は「漢字の学年配当を決める最も重要な基底は、語いである」とのべている(田中久直:1956, p.199)。これにならっていえば、漢字問題の基底となるべきは語いなのであって、その根拠のない問題は、A Jの学力判定にあまり意味がないということになる。学術基本用語集に関連づけられた語いや漢字のテスト問題こそ、大学生の学力判定にふさわしい。今回のテストで

は大学新生の学力の現実に、より近づけたのではないかと思っている。(本稿では紙幅の関係上、その調査結果には触れられない。関心をおもちの方は、角知行：2010 をご覧いただきたい)。

第2は、語い指導の指針化である。初年次教育のひとつの目的として、日本語力の向上がある。その手っとりばよい方法のひとつが語い増強 (vocabulary building) である。それは小学校や中学校で基礎学力の向上策として、漢字ドリルや語いドリルが行われるのと同様である。こうした機械的な授業方法が良いとは思わないが、低学力の学生に対しては、まず語い力をつけるしかないという現実もある。

2009年度の春学期、前年度の基礎ゼミナールの必修単位を落とした再履修クラスを担当したが、このクラスでは、通常の学習課題以外に、毎時限 20~30 分の時間をつかって、自作の単語練習帳による語い学習 (小テスト、漢字の書き取り、用語の意味しらべ等) を行った。こうした緊急の学力補強の局面で、学術基本用語集は意味をもつ。

第3は教材の指針化である。筆者の大学の初年次教育でも、読解、作文、ノートテイキング、スピーチという4技能について、スキルの獲得を中心とした授業をおこなっている。すでに数年の経過があり、いろいろな教材が作られているが、必ずしも統一性があるわけではなく、テーマは混在している。

教材の選択について、学術基本用語は指針をあたえることができる。先にみたようにキーワード (重要語) である「エコロジー」、「グローバリズム」、「構造主義」、「国民国家」といったいくつかを、授業のテーマにすることも考えられる。あるいはそれぞれについて解説した文章を用意し、それらを読みすすんでいく中で、関連した下位用語や一般的な用語の獲得も目ざすこともできる。ちなみに英語文献には、現在社会が直面するいろいろな問題を各章のテーマにしなが、文章中の学術基本用語 (academic word) の獲得をはかるという教科書がみられる (たとえば、SCHMITT, D & SCHMITT, N : 2005)。

留学生教育においても初年次教育と同様に、学術基本用語集を活用できる局面はあるのではないだろうか。日本語能力試験の0級 (級外) の語いが大学初年度から多く出現するという現実をみたとき、A J 教育のなかに学術基本用語の学習を組み入れることは、当然考えられてしかるべきであろう。今回試作した用語集は仮のものであるが、教育上の効用を予想することができた。今後、議論がふかまり、標準的な学術基本用語集の編集が進むことを期待したい。本稿がそうした関心を喚起することに少しでも役立てば、幸いである。

(すみ ともゆき・天理大学・tmyki401@concerto.plala.or.jp)

注

1. 日本語読解学習支援システム。ウェブ上で公開され、漢字や語いのレベルを判定できる。

参考文献 (アルファベット順)

- 林四郎 (1982) 「日常語、専門語および表現語」 森岡健二他(編)『講座 日本語学1』明治書院、40-58
- 石原千秋 (2007) 『秘伝 大学受験の国語力』新潮社
- JOHNSON, Eli R., (2009) *Academic Language ! Academic Literacy ! : A Guide*

For K-12 Educators, Corwin

- 門倉正美・筒井洋一・三宅和子(編)(2006)『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房
- 甲斐睦郎 (2002) 「現代日本語の基本語彙」 飛田良文・佐藤武義(編)『現代日本語講座 第4巻 語い』明治書院、25-45
- 国立国語研究所 (2000) 『日本語基本語彙—文献解題と研究』明治書院
- 小宮千鶴子 (2005) 「理工系留学生のための化学の専門語—高校教科書の索引調査による選定」『専門日本語教育研究』第7号、29-34
- 窪田富男 (1989) 「基本語・基礎語」 玉村文郎(編)『講座 日本語と日本語教育 第6巻 日本語の語彙・意味 (上)』明治書院、141-166
- 水本光美・池田隆介 (2003) 「導入教育における「基礎専門語」の重要性—環境工学系留学生のための語彙調査と分析から」『専門日本語教育研究』第5号、21-28
- NATION, I.S.P., (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*, Cambridge University Press = (2005) 吉田晴世・三根浩訳『英語教育のためのボキャブラリーラーニング』松柏社
- SCHMITT, Diane & SCHMITT, Norbert, (2005) *Focus on Vocabulary : Mastering the Academic Word List*, Longman
- 角知行 (2009) 「教科日本語における漢字のカベ—その予備的考察」『社会言語学』第IX号、63-80
- (2010) 「大学新入生の日本語力—2009 年度学力調査から」『総合教育研究センター 紀要』(天理大学人間学部) 第8号、1-20
- 田中久直 (1956) 『国語科 学習基本語彙 指導の実際』新光閣書店

資料:学術基本用語(その1)

アイデンティティ	葛藤	緊張	錯綜	焦燥
曖昧	カテゴリー	吟味	錯覚	情緒
アイロニー	寡聞	空間	些末	象徴
軋轢	カリスマ	偶然	斬新	常套
アナログ	感慨	偶像	思惟	称揚
アナロジー	喚起	具体(的、化)	恣意	叙事情
アニミズム	環境	グローバリズム	自我	叙情
アプリオリ	換言	経緯	弛緩	助長
アプローチ	還元	形骸	此岸	所与
アンチテーゼ	甘受	契機	自己同一性	自律
アンチノミー	干渉	経験	示唆	ジレンマ
アンニュイ	感傷	迎合	思索	人為
アンビバレント	観照	啓示	システム	真摯
遺憾	感性	形而下	市井	心象
依拠	陥穽	形而上	自然	シンボル
畏敬	観点	啓蒙	指弾	神話
意匠	観念	希有	桎梏	垂涎
位相	感銘	懸念	実在	趨勢
依存	帰依	顕在	実存	崇拜
異端	危惧	現実	シニカル	杜撰
一義(的)	既成	現象	指標	ステレオタイプ
一元(的)	軌跡	嚴然	自負	スローガン
逸脱	帰属(意識)	顯著	自明	正統
逸話	忌憚	権利	ジャーナリズム	絶対
イデオロギー	既知	権力	捨象	折衷
畏怖	帰納	狡猾	ジャンル	刹那
隠蔽	規範	嚆矢	終焉	摂理
迂遠	忌避	構造	修辞	拙劣
営為	機微	構造主義	自由主義	是認
エートス	詭弁	拘泥	収束	先駆
エゴイズム	欺瞞	後天(的)	収奪	繊細
エコロジー	逆説	高踏	周知	潜在
演繹	客体	傲慢	羞恥	漸次
横溢	客観	合理	執着	前提
謳歌	脅威	コード	シュールレアリズム	先入観
恩寵	狭義	国民国家	収斂	羨望
懷疑(的)	矜持	固執	主観	想起
諧謔	凝視	後生	趣向	遭遇
介在	享受	個人主義	主体	造詣
蓋然(性)	郷愁	コスモス	主題	総合
概念(的)	凝縮	コスモロジー	主体性	相克
外発(的)	共生	悟性	受動(的)	相殺
乖離	共通感覚	言霊	呪縛	創造
カオス	強迫	誤謬	需要	相对
画一	享樂	鼓舞	順境	疎外
革新	虚偽	語弊	純粹	属性
覚醒	虚構	痕跡	止揚	齟齬
過剰	巨視的	コンテキスト	照応	咀嚼
仮説	虚無的	混沌	昇華	体系(的)
カタルシス	禁忌	差異	常識	対峙
画期的	均衡	錯誤	饒舌	対照

資料:学術基本用語(その2)

対象	独善	風潮	メディア
ダイナミズム	独断(的)	敷衍	模倣
退廃	ドグマ	俯瞰	モラトリアム
対比	匿名	不合理	揶揄
多義	吐露	不条理	有機(的)
多元	徒劳	腐心	ユートピア
惰性	内発(的)	風情	遊離
脱却	内包	不断	擁護
建前	ナショナリズム	払拭	様相
妥当	ナルシズム	普遍	礼賛
多様(化、性)	二義的	付与	樂觀
他律	二元論	プライバシー	リアリズム
端的	ニヒリズム	プロセス	理性
知覚	如実	文化相对主義	理念
知悉	二律背反	分析	溜飲
秩序	人間中心主義	分節	流動
抽象	認識	文明	両義
超越(的)	ネガティブ	弊害	輪郭
鳥瞰	捏造	閉鎖(的)	類型(的)
兆候	能動	閉塞	流布
超克	ノスタルジー	偏見	レトリック
嘲笑	バーチャル	弁証法	連綿
直截	媒介	変遷	狼狽
直喩	媒体	萌芽	ロゴス
直感	破綻	包括	歪曲
陳腐	パトス	放棄	矮小(化)
通曉	パラダイム	彷徨	
通時	パラドックス	墨守	
通念	反芻	母語	
低回(趣味)	範疇	ポジティブ	
定義	氾濫	保守(的)	
ディテール	ヒエラルキー	ポストモダン	
諦念	彼岸	本質	
デカダンス	悲観(的)	本音	
テキスト	卑近	凡庸	
テクノロジー	非合理	マイノリティ	
デジタル	微視的	マクロ	
徹底	批准	マジョリティ	
転嫁	皮相	末期(的)	
典型(的)	畢竟	蔓延	
伝統	必然	未知	
伝播	皮肉	民俗	
当為	非日常	無為	
投影	誹謗	無意識	
憧憬	比喩	無機(的)	
洞察	ヒューマニズム	矛盾	
踏襲	表象	無常	
陶醉	漂泊	明晰	
淘汰	頻繁	命題	
撞着	フィードバック	明瞭	
特殊	フィクション	メタファー	